

# 10日間の派遣期間を終えて

小川美紀

今回の派遣事業はたまたま武蔵藤沢駅の掲示板で見かけ、予定している留学へのモチベーションを高めようと応募したものでした。海外経験はあったものの英語でのコミュニケーションに自信はなく、積極的にコミュニケーションを図ることを目標に掲げていたので、出発前は楽しみと不安が入り交ざった複雑な気持ちでした。今回、私以外は全員高校生だったので、事前研修時から私が引っ張っていかないと！と感じていました。しかし、みんなとってもおとなしくこんなに静かな雰囲気でも10日間も異国での交流が出来るのだろうかとただただ心配でした。

リーダーとしてそんな不安を抱えたまま約12時間の長いフライトを終え、ヴォルフラーツハウゼン市の方々の歓迎を受けた私たちは各ステイ先へ。今回、私をゲストとして受け入れてくれたゴラー家は過去にもホームステイの受け入れをしており、日本人の私を迎えることに慣れているようでした。ホストファザーのシュテファンさんは庭園設計の仕事をしており、庭やテラスの設計もしたそうで、緑豊かなせいか1mくらいのヘビが出るそうです。

↓ここでは家族揃ってディナーをしました！



まだまだ緊張気味の私たちですが、翌日からはたくさんのプログラムが組まれており、まずは表敬訪問から始まります。クラス・ハイリングレヒナー第一市長は前日の歓迎会で既にお会いしましたが、笑顔が素敵なおともチャームングで親しみやすい市長さんでした。表敬訪問が終わるとすぐに幼稚園や農場見学、山散策といったプログラムがあり、長時間フライトと時差ボケに加え、重いリュ

ックを背負っていた私は2日目にして家で休みたい衝動に駆られていましたが、そう言っていられないほど毎日が充実していました。3日目には憧れのノイシュヴァンシュタイン城へ。よくテレビや写真で見るノイシュヴァンシュタイン城は隣の険しい山から撮影したもので、実際行ってみると側壁を見る形になるので、また違った雰囲気 of ノイシュヴァンシュタイン城を見ることが出来ます。

【お城を背景に集合写真/違う角度からのお城】



そしてこの日、ホストブラザーで私と同じ年のセバスティアン/バスティと長男レオポルトのガールフレンドであるフランツィと一緒に湖へ泳ぎに行きました。もう19時過ぎだということに外はまだ明るく、15時頃に思えました。湖は少し冷たかったのですが、意を決して全身浸かり泳ぎました！日光浴やバーベキューをして楽しんでいる人もいて、日没が遅いドイツならではの楽しみ方だと感じました。あっという間に4日、5日とすぎて行き、毎日たくさんの方と交流することで日に日にドイツ滞在期間が短いことを思い知らされました。

お別れパーティーでは感謝の意を込めて書道や歌、フラフープを披露しました。

【お別れパーティーでバスティとの一枚/第一市長へ書道の作品を贈呈】



今回の派遣事業で、私は出来るだけ自力でたくさんの方とコミュニケーションをとることを個人的な目標にしていました。勇気を出して自分からコミュニケーションをとりにいった甲斐もあり、ホストファミリーも「またいつでもおいで！」と喜んでくださり、青少年たちとも Facebook など繋がる事が出来ました。

様々なプログラムを通して、たくさんの方と交流を持てたことをとても嬉しく思います。そしてこの派遣事業にたくさんの方が関わり、協力して下さったことに感謝するとともに、今後、姉妹都市友好関係の発展に貢献していきたいと思っています。ありがとうございました。

## ドイツの思い出

小川 沙紀

今回の派遣事業は私にとって初めての海外でした。出発前は、人見知りや英語力も乏しいため、ひとりでのホームステイ大丈夫かな？という不安が9割もあり、初の海外への期待・楽しみが1割でした。行きの飛行機の中では、「今〇〇の上を飛んでいるのかな？」なんて想像していましたが、到着まであと3時間というあたりで胃が痛くなり、そこですでに日本に帰りたいなあと考えていました。(笑)

空港に着くと当たり前ですが日本とは景色が違い、「もうドイツにいるんだ！」と実感しました。時差というものも初めての経験で不思議な感じでしたが、時差ボケはしなかったです(ノ＼\*)

ヴォルフラーツハウゼン市は、思っていたよりも自然が豊かで緑が多くあり、建物など全てがおしゃれで素晴らしい街でした。



【家の窓から見た朝日がきれいでした】

9日間毎日びっしりと予定があり、1日1日が濃く、たくさんの経験ができました。この派遣期間の中で思い出深いのが、射撃をしたことです。ホストファザーとホストマザーが毎週火曜日にやっているそうで、連れて行ってくださいました。日本ではあまり出来ない体験だったのでとても嬉しかったです！



【銃はちょっと重くて腕がプルプル震えました。(笑)】

恐らく、的まで 10 メートルくらいなのですが、真ん中に当てるのはすごく難しく、的に当たらないこともしばしば。ホストブラザーのアレクサンダーさんはとてもうまいそうです。私もうまくなりたいので日本でもやりたいなと思いました。



帰りの飛行機の中から見た雲海 ・Θ・)

私は、行きの飛行機も帰りの飛行機も残念ながら真ん中の席だったので、窓側の華穂にカメラを渡して撮ってもらいました！！行きも帰りも窓側になれなくて真ん中の席だったのは辛かった。ドイツと日本は遠いけど、空はどこまでも繋がっているんだなぁと思いました！



## ～ファンタスティックなレフラー家～

三星天子

ヴォ市は本当に素敵な所でした。食べ物（白ソーセージ with マスタードが特に！）もおいしくて、いい人たちばかりでした！景色もきれい！ごみが全く落ちていない！素晴らしい場所です！滞在中の 8 日間、タイトなスケジュールではありましたが、市役所の方や世話をしてくれた青少年の方、また通訳の高間さんのおかげで、毎日楽しむことができました。たくさんの人に感謝したいです。一番感謝したいのが、レフラー家の方々です。ということで、レフラー家の方々について紹介したいと思います。

訪問する前は本当に不安だらけでドイツに向かう日が近くなるに連れて、不安が大きくなりました。“何を話せばいい…？” “ホストファミリーが冷たい人だったら…？”。期待よりも不安が大きかった気がします。不安を取り除いてくれたのが、レフラー家の方々だったのです。長時間のフライトを終え空港に降り立った時、誰がクリスティーネか瞬時に分かりました。最初は、近寄りがたいなと思っていたのですが…全くそんなことはなかった！面白くて、騒ぐのが大好きな人でした。お父さんのヴォルフガングも愉快的な人でした！いつも変なことを言って笑わせてくれました。一番笑ったのが、ヴォルフガングとクリスティーネと夜散歩していたとき。いきなり(本当に突然)クリスティーネがヴォルフガングに向けて“はいっ～！”。それにたいして、ヴォルフガングが“どおっ～！”と一撃。剣道の真似をしていたのです。この時、笑い死しそうでした。娘さんのイザベラとキャロラインは今回世話人でなかったのですが、仲良くなれるか不安でしたが…そんなことはなかったです。イザベラは本当にアクティブな女の子でした！一緒にいて楽しかったです。イザベラは観光地に行った時に、英語で何て言うのか一生懸命考えながら私に説明してくれました。本当にうれしかったです。キャロラインはヴォ市に一日だけしかいらなかったのですが、夕方にキャロラインと馬で散歩する機会がありました。キャロラインはキャメロン・ディアスにそっくりでした！英語が上手で話しやすかったです！馬に乗っている時、常に気遣ってくれ

て優しかったです。

レフラー家の方々には本当にお世話になりました。レフラー家にホームステイできて本当に幸せでした。また、是非行きたいです。来年、イザベラとイザベラの親友イリーザが入間に来るそうなので会うのがとても楽しみです。



この事業に参加させていただき、本当によかったです。温かく私たちを迎えてくださったヴォルフラーツハウゼン市の方はもちろん、この事業に協力して下さった方々、親にも感謝したいです。そして澤田団長、和田さんもありがとうございました！仲良くしてくれた美紀さん、沙紀さん、華奈、華穂もありがとう！めったにできない経験をさせていただいて、本当によかったです。この経験は忘れません。宝物です！Danke！



# DANKE! Germany☆

松田華奈

10時間の楽しいフライトを終え、いざドイツに降り立ちました。  
なんと飛行機から空港までバスで移動しました。  
外に出ると日本と比べて涼しく空気が気持ち良かったです。  
着いた当日のイベントは市役所近くのレストランでの歓迎会です。ヴォルフラーツハウゼン市の方々は私たちを温かく迎えてくれました。まず一番目にドイツで驚いたことがありました。事前研修でも聞いていましたが外食はとても量が多かったことです。でも、とてもおいしかったです。

滞在中はノイシュヴァンシュタイン城、ヴァルドラム幼稚園、ヴィース教会、オリンピック・スタジアムなどの見学、山やパートナッハ溪谷の散策、市内観光やショッピングなど、毎日とても充実していました。

その中でも一番の思い出はホストファミリーとの毎日です。



20歳のリディアはミュンヘン空港からのバスではとても静かで大人しい人なのかと思っていましたが、家に着くととても元気に話すので初めはとても驚きました。また、家の近くにある川に行った時には足元が真っ暗の中でカエルをたくさん見つけていたので目が良いのかなと思い羨ましかったです。他にも毎日折り紙で遊んだことは忘れられない良い思い出となりました。

ホストファザーのヴィクトールさんは私よりも日本に詳しく、東北地方にある博物館に行ったことがあると聞き、私もそこに訪れたことがあったのでとても驚



きました。さらに東日本大震災で被害を受けた気仙沼市にも訪れ、日本に住んでいる私が被害の状況、その時のストーリーを教えてくださいました。ドイツで外国人に日本を教えてくださいるのは予想もできませんでした。それにヴィクトールさんの鉱石のコレクションを見せてもらった際、私の家にあるものと同じ鉱石を見つけたり、綺麗な鉱石をみたりしてとても楽しかったです。

ホストマザーのアンゲリカさんはホームステイ初日に朝起きれるか自信がないと話したら毎朝起こしに来てくれたり、毎日美味しい食事を作ってくれたり、部屋のクッキーを補充してくれたりとても親切にしてくださいました。また、私が覚えたドイツ語を話すとても喜んでくれました。

猫のシェッキーはゲストにとっても懐くとホストファミリーから聞いていたのですが、気がつく近くにいるので毎日癒されました。

シェッキーは私が日本に帰る日には私の着ている洋服に毛をたくさんつけるプレゼントをしてくれました。(ホストファミリー曰く)

リディアも帰り際に“we are best friend”と言ってお揃いのプレスレットをくれてとても嬉しかったです。

この派遣では一人では決して経験出来ないことをたくさん学ばせていただきました。ありがとうございました。



## 異文化体験を終えて

浦上華穂

異文化体験を終えて、ドイツのヴォルフラーツハウゼン市は本当に良いところで、私はそこで貴重な体験をさせてもらったんだと日本に帰ってきて感じました。8泊10日という長いようで短いこの派遣期間はいろいろなことを体験し現地の人々との交流も深められたと思います。特に、私は入間市とヴォルフラーツハウゼン市の姉妹都市の交流をさら深めるために貢献できたと思います。なぜなら、去年の夏に派遣事業としてヴォルフラーツハウゼン市から来て私の家にホームステイしたフィーリップが、今回の派遣事業で私がお世話になったホストファミリーだったからです。お互いの顔を知っていたため、私はあまり緊張せずにドイツへ行くことができました。

ヴェーベ家の家はとても広く、私の家が小さく感じられるほどでした。庭にはトランポリンや滑り台があり大きなテレビまでありました。



私は大きなトランポリンを見て、やってみたいとホストマザーに言うのをやらせてもらえました。私は最後にトランポリンをやったのが幼稚園以来だったのでとても楽しかったです。ですが、ちょうどその時いところが遊びに来ていて、そのいところが私とホストマザーの前でトランポリンを飛ぶとなんとトランポリンが壊れてしまうというハプニングが起きました。



私はお互いの顔を知っているためあまり緊張せずいけると思っていましたが、ホストファミリーの家に行き日本人が私一人になるとやはり緊張してしまっていました。ですが、このトランポリンの件で私とホストマザーといとこが大爆笑してずっと笑っているとその緊張がとれて仲良くなることができました。もうトランポリンができなくなってしまったのは悲しかったけれど、みんなと少しでも仲良くなれた嬉しさの方が大きかったです。

そして、私が一番印象に残っていてよかったなと思うことはドイツの民族衣装と日本の甚平を交換したことです。

これは、フィーリップのガールフレンドのサラの家へ遊びに行ったときサラが小さくなった民族衣装をくれたので私もたまたま持ってきていた甚平をあげたのです。

また、フィーリップは、去年日本に来ていた時に買っていたので民族衣装と甚平を着て三人で写真をとりました。この写真は、私の一番のお気に入りです。



派遣期間中のプログラムにも民族衣装を着るプログラムがあったので私は2回民族衣装を着ることができました。みんなとても似合っていて可愛かったです。





また、ドイツ側の通訳の高間さんが飼っている犬はクマという名前で、日本語もドイツ語も理解できるのですごいなと思いました。とても賢くて高間さんが大好きです。クマは私たちもとても可愛がっていたので日本に帰るときはとても悲しかったです。またクマに会いたいです。

この8泊10日、ホストファミリーの人にはたくさんお世話になりました。ホストファミリーの中で唯一の女性であるエリザベートは私にとっても良くしてくれました。たくさん話しかけてくれたりいろいろなところに連れて行ってくれたりしました。



フィーリップは、全てのプログラムについてきてくれて私にたくさんの経験をさせてくれました。カタコトの日本語で話しかけてくれることもありました。フィーリップのガールフレンドのサラが一番仲良く出来たと思います。歳も近くて一緒にショッピングしたりたくさんのお話をしました。

末っ子のマニュアルはとってもハンサムで、プレッツェルの体験などを一緒にした時にみんなから可愛い可愛いと言われていました。この写真はマニュアルがポテトチップスを作っているところです。とても美味しかったです。



ヨーゼフさんは毎日仕事で忙しくてあまり会えなかったけど、朝食や夕食の時にたくさん話をしました。新聞に載っていることを嬉しく思ってくれたり、とても優しくかったです。オリヴォーは私の一個上でとてもカッコよかったです。足を怪我していて外に出られずかわいそうでしたが、一緒にゲームをした時はとても楽しかったです。

とても優しく楽しく明るい家族でした。またいつか会える機会があればいいです。ホストファミリーのおかげで本当にいい思い出ができました。ドイツの新聞に載ったり初めてのゴルフをしたり、有名なノイシュバンシュタイン城へ行けたり溪谷歩きをしたり、たくさんの経験ができて本当に良かったと思います。私がこの派遣事業に応募したきっかけは、国境を越えた友達をたくさん作ることでした。今回の派遣事業で、ドイツでたくさんの友達ができたくさんの思い出もできました。本当にこの派遣事業に応募して良かったと思います。



## 再会と新たな出会い in Wolfratshausen

和田千寿

前回の訪問より早二年を経て 2014 年 7 月 23 日、再びミュンヘン空港へ到着。出迎えてくださった方々は私にとっては懐かしい人たちばかり、すぐに“hug”の嵐となりました。

用意していただいたプログラムは青少年たちにとっては、とても楽しくて興味深いものだったことでしょう。連日、ヴォ市の青少年たちが同行してくれたのですが、最初はなかなかドイツと日本で交わることができず、傍で見ているもったいないなと思いました。澤田団長が青少年たちに助言してくださったこともあり、そこは若者同士、日に日に打ち解け合って行けました。ホストファミリーの皆様には暖かく受け入れていただき、青少年たちの顔は日が経つ毎に明るくなっていきました。

ここで、嬉しいエピソードをひとつお話ししたいと思います。

お別れ会の前日、突然、ピアノと歌の練習をする為にフィーリップ・ヴェーベくんのお宅を全員で訪問することになりました。フィーリップくんは去年の夏、青少年訪問団として入間市へ来ていましたので既に知っていたのですが、彼のご家族にお会いするのは初めてでした。青少年が練習をしている間、私はヴェーベ夫人と初めてお会いしお話しすることができました。笑顔の美しい、優しい方でした。“この度はホストファミリーをお引き受けくださってありがとうございます。”と申し上げますと、彼女は“去年は息子が入間で大変よくして頂き常々、お返しをしたいと思いますので、新聞で今回のホストファミリー募集の記事を目にしたその場で市役所に電話をして申し込みました。ましてやゲストが去年お世話になった浦上家のお嬢さんだと知った時は本当に嬉しかったです。”と話してくださいました。この様に交流が継続されてこそ、真の友好が構築されて行くのではないのでしょうか。ヴェーベ家にはフィーリップの下に二人のイケメンの弟

さんたちが控えているのできっと更に交流が続く事が期待できそうです。 ヴェーベファミリーは私が今回、唯一新たに出会ったヴォ市民でした。いつの日か入間にお迎えさせていただける日を楽しみにしています。

Ein Wiedersehen(再会)：今回も沢山の方々との再会が実現しました。



【ジビレさんと】 【左からリタさん、ゲイルさん、ガービーさん】

前第一市長のフォルスター氏は、歓迎会の夜、私達に会いに来てくださいました。突然の登場に嬉しいサプライズとなりました。

数年前の万燈祭りに来てくださったリタさんをご自宅へ夕食にご招待してくださいました。ご主人とも話が弾み穏やかで楽しいひと時でした。

去年の万燈まつりでお会いしたゲイルさんとガービーさんは、ミュンヘン観光の際に同行して下さり、リタさんも加わり私の買い物を一緒に案内してくださいました。そして、数年前に入間に来てくださったジビレさんも、4日目の夏祭りの夜、会いに来てくださいました。また、長きに渡り、これまでの第一市長の秘書を務められたレギーナさんとガービーさん、そして私がドイツのママと呼んでいるゲルディーさんが、池のほとりに佇む素敵なレストランへ夕食にご招待してくださいました。また、クラウディアさんもヘルガさんも夕食にご招待くださいました。両家のバーベキューはどちらもとても美味しかったです。また、日曜日はクラウディアさんとカリンさんが私のリクエストに答えてリンダウへ連れて行ってくださいました。リンダウは千年以上の歴史がありそれは美しい町でした。



【クラウディアさんとカリンさん】【クラウディアさんからのプレゼント】

このように私と澤田さんは毎日のようにどこかへご招待いただき美味しい食事をご馳走になりました。ここでこの度、お世話になった皆様に心より御礼申し上げます。

帰国の前夜に開催したお別れ会は、和やかな雰囲気の中に進められ、青少年たちが書道のデモンストレーションを始めるとヴォ市の人達は、興味深げに見入っていました。美紀ちゃんの“友好”の文字は美しかったです。続く折り紙を折りながらのフラフープの実演では華奈ちゃんと沙紀ちゃんがいとも簡単にやってみせ拍手を浴びました。

最後は”Let it go”を英語・日本語とドイツ語を交えヴォ市の人達と一緒に歌いました。皆で楽しく歌うことができました。特に、天子（てんこ）ちゃんがマイクの前で堂々と歌い、美しい声と完璧な英語の発音は素晴らしかったです。華穂ちゃん素敵な伴奏をありがとう。お世話になったヴォ市の人達に喜んでいただけただけで本当によかったと思いました。また、クライマックスは先程、ご紹介したゲイルさんが “友好” という文字を花火でプレゼントしてくださいました。感動的でした。何て愛すべき素敵な人達なんだろうと、毎回感動してしまうのです。そのようにハイリングレヒナー第一市長に申し上げたら “入間の人たちも同じだよ。” と言ってウインク。そう、ヴォ市との交流の後はいつも心に温かいものがこみ上げてくるのです。

ハイリングレヒナー氏にお別れ会で第一市長としてご挨拶いただきその通訳を

務めさせていただき嬉しく光栄に思いました。



【ハイリングレヒナー第一市長とバイエルンの民族衣装を着た私】

青少年の皆さんには、今回の派遣事業で得ることの出来たヴォ市のファミリーと友人をこれからも大切にしていきたいと願っています。そして、一人でも多くの入間市民の皆様へ、私達の大切な姉妹都市に暮らす愛すべきヴォ市民を知っていただきたいものです。10月にはヴォ市から万燈まつり訪問団15名がやって来ます。訪問団の皆様へ喜んでいただけます様、微力ながら尽力してまいりたいと思っています。

滞在中、きめ細かく皆を気遣ってくださった澤田団長、本当にご苦労様でした。最後にこの度は通訳として同行させていただく機会をいただきました事を、両市長をはじめ関係者の皆様へ心より感謝申し上げます。



## 異文化体験訪問団派遣事業で思うこと

澤田和也

姉妹都市ドイツ・ヴォルフラーツハウゼン市との交流事業の一環として、平成元年から青少年を対象とした異文化体験訪問団相互交流事業を実施しています。

この青少年交流事業は、16歳から22歳になる主に高校生及び大学生を対象とした相互交流事業であり、ホームステイや異文化体験を通じてお互いを理解し認め合う心を育むこと、両市の友好関係の発展に寄与することを目的に実施しています。

今回は、7月23日（水）から8月1日（金）までの8泊10日の期間で、青少年5人（専門学校卒1人、高校生4人）と随行通訳者と共に団長として訪問しました。今回は訪問時期を1週間ほど早めたことから、定期試験の日程と重なった大学生2人が参加辞退をする状況になってしまいました。

今回の訪問に際して、青少年は4回の事前研修で両市の交流の歴史やホームステイでの約束事、ドイツ語の学習をしました。また、入間市国際交流協会の定期総会では、大勢の会員の前で「派遣に向けての抱負」を発表し、結団式では田中市長や齋藤国際交流協会会長の前で抱負を述べました。更に、FM茶笛の番組では、派遣事業への意気込みを披露するなど、派遣事業に対しての様々な事前学習に取り組みました。

女子高校生を中心とした今回の訪問団は、与えられた課題を順調に消化して派遣事業に望みました。





ヴォルフラーツハウゼン市の滞在では、様々なプログラムが用意されていました。日本の気候とは違い、夏とは思えない程とても涼しく過ごしやす過ぎ易い快適な日々が送れました。今回の訪問では、ヴォルフラーツハウゼン市の商店見学と学校施設の見学をリクエストしました。2日目に訪問した『ヴァルドラム幼稚園』では、幼児期からの環境教育への取り組みや将来の青少年との交流を楽しみました。また、入間交流協会のディートリント・ディーペン会長が取り組んでいる、山の自然環境を活かした環境保全の取り組みについて、山の散策をしながら学びました。その様子は、「大切に育まれた友好」と題して、現地の南ドイツ新聞に取り上げられました。



プレート作り体験は青少年には非常に興味深いものであり、両市の青少年はお互いを尊重しながら活発な交流が図れていました。早朝より仕事に取り組んでいる職人さんが、就業時間後まで親切・丁寧に指導をしてくれたことには非常に感謝しています。また、毎回恒例となっている民族衣装の試着体験では、訪問団全員が民族衣装を試着してバイエルン人の気持ちになりました。

このように異文化体験を通じてお互いの気持ちを理解することが、今回の派遣事業の目的のひとつであり貴重な体験をすることが出来ました。



参加した5人の青少年は、今回の派遣事業が生涯忘れることのないものであり、今後の人生においてきっと役立てることのできる経験であったと思います。私自身、初めての訪問団長としての訪問でありましたが、事故もなく、参加した青少年が無事に交流を図ることができました。

また、今回新たに第一市長となられたクラウス・ハイリングレヒナー氏に、今後の両市の交流推進について意見交換をし、これまでと変わることなく交流推進を図る考えであることを確認できました。

これまでの両市の交流事業の取り組みの積み重ねにより、両市の姉妹都市としての確かな絆が確立できているものと、ヴォ市市民との交流の中で感じる事が出来ました。

両市の交流の成果はヴォルフラーツハウゼン市民に確実に拡散しています。



最後になりますが、今回の派遣事業ではヴォルフラーツハウゼン市民のご協力により、次世代を担う青少年の交流が図れたことに感謝いたします。次年度以降の受入の際には、我々が誠心誠意の気持ちで受入をすることが、相互交流の魅力を最大限に発揮できるものと考えています。

両市の多くの方々のご協力により、本派遣事業が無事終了できたことに改めて感謝を申し上げます。



## 【学習の記録】

### ドイツの仕事・アルバイトの状況について

小川 美紀

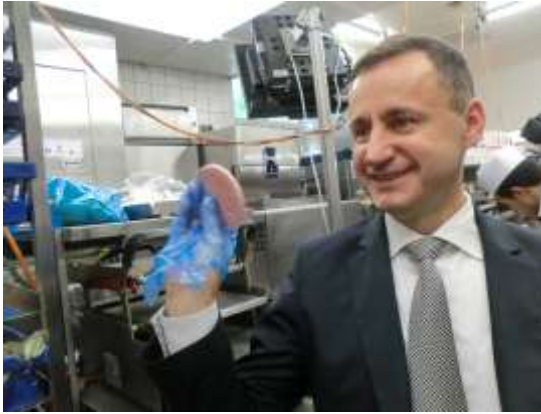
私は、高校生の時からいくつかのアルバイトを経験し、アルバイトというものを身近に感じていたこともあり、「仕事・アルバイトの状況について」を学習テーマに設定しました。今回、マクドナルドにて見学及び統括マネージャーの方からお話を伺うことが出来ました。



まず、世界規模で展開しているマクドナルドですが、ドイツでは28店舗ほどの展開で、8割が委託業務によるものです。私たちが見学した店舗もフランチャイズ会社運営のものでした。この店舗ではここ数年、売り上げが伸びず割引券配布やサービスの向上、衛生管理の徹底、地域の特性を生かしたヒット商品を生むなどの努力をし、売り上げを伸ばすようにしているそうです。ドイツのマクドナルドユーザーは、品質を重視する傾向がありますが、やはりファーストフード店ということもあり、価格も重要になってきます。90%の肉・卵が地元産を使用しているドイツでは、今後、クオリティを高く維持しながら価格を下げることを課題としています。



## 【学習の記録】



次に、仕事・アルバイトの状況についてですが、ドイツではアルバイトとは労働全般を指す言葉であり、日本語でいうアルバイトの意味とは異なり、更にシステムにも違いがあります。まず時給について。日本でアルバイトとして働く場合、時給750～1000円程度が一般的ですが、ドイツでは6～8ユーロ、チップとして多少多くなることもあるそうです。正社員の場合は、時給換算すると8.50ユーロが最低時給として法律で定められているため、この金額が支払われますが、マネージャーなどの管理職になるとそれだけ時給も高くなります。

日本では、ほとんどの企業が新入社員またはアルバイト採用後に研修期間を設けていますが、一般的には数ヶ月単位のものかと思えます。ですがドイツは、正社員になるためには職業学校という専門的な学校に通うことから始まり、インターンシップを経験しながら3年（職業学校での成績が良いと2年半）の長い研修期間を終え、国家試験を受け、合格すると資格が与えられます。そしてようやく正社員として働くことが出来るのです。日本で高校や大学・専門学校を卒業して就職するといった流れとは異なり、中学生の段階で自分の将来を見据えて大学進学するための高校に通うのか、或いは専門職に就くため職業学校に通うのか、そういったドイツの教育システムがこのアルバイトの話にも関わってきます。

少し複雑で混乱してしまいましたが、このようなシステムは早いうちから自分の将来のことを考え、それに向けて勉強することは良いことなのではと感じました。

## 【学習の記録】

9

# ドイツで学んだ建築について

小川 沙紀

建築は、ホームステイした家や見学したお城・教会などとても身近なもので、必要不可欠なものです。私はドイツの建築に興味があったので、建築を学習テーマにしました。

まずはドイツの一般的な家庭について書きたいと思います。ドイツの家の屋根は、ほとんどが三角屋根で、屋根の色は茶色か赤色に統一されています。3階建ての家が多く、地下があり、その3階の部分は、日本でいう屋根裏部屋のように屋根の下に部屋があります。日本では2階建て+屋根裏部屋ですが、ドイツでは余す空間なく、屋根の下の3階部分まで広い空間になっています。私がホームステイした部屋も3階で屋根の下だったので天井が斜めでした。そして部屋にある窓は、ドレーキップ窓という日本の家庭ではあまり見かけない窓でした。窓の1つ1つに網戸がないので虫が入ってくることもあります。ドイツでは、屋根の色を統一し外観を大切にするので、建物にベランダのようなものがありますが、洗濯物を干したりはせず花が飾られていました。



また、雪が降る地域では、落雪を防ぐ為に屋根に柵が設置されています。更に、雪が入らないように煙突には屋根がついています。落雪での事故は、落雪したその家の責任になるそうです。ドイツ・ヨーロッパの建物は鉄骨が入っていない為、地震対策が出来ていません。なので、震度3くらいでもドイツの人は逃げるらし



## 【学習の記録】

いです。ヨーロッパに行ったら地震に気をつけてください！

ドイツでは、建物の高さに制限があります。ヴォ市では教会より高い建物を建ててはいけません。ミュンヘンでは、オリンピックタワーの99メートル以上の建物を建ててはいけません。日本のように高層ビルなどがないので、オリンピックタワーからの眺めはとても良いです。ドイツでは、一つの建物にいくつかの家族が住んでいることがあり、家の前についている呼び鈴の数で分かるそうです。

次に今回見学に行ったノイシュバンシュタイン城についてです。このお城は1800年代に建設され、比較的新しいお城です。レンガ造りのため、釘などは一切使われていません。レンガで造られていますが、古く見せる為にレンガの上から壁が塗られています。岩の上に建てられているため、お城の形が台形になっています。なので、台形に見せないために、遠近法で中にあるシャンデリアの大きさが違います。王様が白鳥好きなのでお城の中にはたくさんの白鳥の絵や置物がありました。とても有名で人気のノイシュバンシュタイン城ですが、まだ世界遺産にはなっていないそうです。とても綺麗なお城でしたが、お城の全体の写真は向かい側の橋からじゃないと撮れないので、今回は行くことが出来なかったので撮れませんでした。



このノイシュバンシュタイン城の向かい側にはホーエンシュヴァンガウ城があります。



## 【学習の記録】

# ごみの分別

三星 天子

残念ですが、今回リサイクルに関する施設に行くことができなかったためドイツのごみの分別の仕方について書きたいと思います。

ドイツの紙ごみはすべてリサイクルしているそうです。ドイツも収集日が決まっているそうです。左の写真は、ミュンヘンで見かけたごみ収集車です。

そして、右の写真はヴォ市にあった犬の糞を捨てるごみ箱です。上にある赤い袋をつかって糞を始末します。このゴミは、市が回収しています。なぜなら犬を飼っている人は、登録していて「犬税」と呼ばれている税を市に払っているからです。



ドイツでは、瓶の中もきれいに洗ってあって、瓶の色ごとに分別されていました。

ごみ箱の蓋の色が瓶の色です。黄色、緑色、茶色、白色(透明)、黒色にわかれていました。本当に、きれいに分別されていました。

## 【学習の記録】



また、プレッツェルをつくった工房でもきれいにゴミが分別されていました。右の写真はドアに注目すると、分別の仕方の紙がはっています。そして、左の写真。きれいに洗って分別されていてリサイクルできるような状態にしていました。



ヴォ市の市長は“ごみを出さない”ことを徹底しているとおっしゃっていました。

ごみを燃やすと二次災害が出るからです。紙のごみは、全てリサイクルしているそうです。私は、ドイツの人が日本の分別の仕方をみたら驚くと思います。ドイツに比べたら、きちんと分別しない人が多いし、ごみが無駄にたくさんでています。ひとり一人が意識すれば、ごみは減るはずです。ドイツの人は日本人に比べたら意識が高いです。今回、ドイツに行ってみてそう思いました。ごみの問題は世界の問題です。いろんな人が、どう改善したら減るかを考えて、動くべきです。日本は、「ごみをなくそう」と思っている人も、実際に実行している人はそんなにいないと思います。今回この事業に参加して多くの事を学びました。この経験を周りの人に話していきたいです。

## 【学習の記録】

### ドイツの住宅と建築について

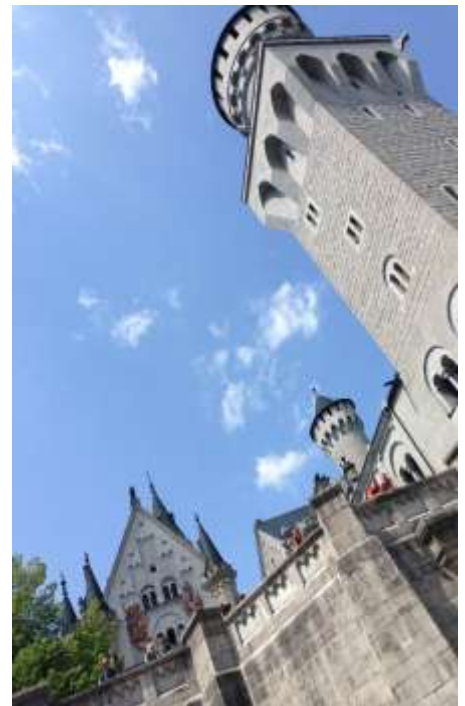
松田 華奈

私はシンデレラ城や眠れる森の美女、美女と野獣にでてくる城のモデルになったノイシュヴァンシュタイン城に興味を持っていました。他にも、環境や歴史によって異なる住宅、建築に興味がありました。

今回ノイシュヴァンシュタイン城、ドイツの住宅を見学したことを述べます。

ノイシュヴァンシュタイン城の外見を遠くからみるとインターネットで見ていた画像と同じでした。城までの坂道の途中まで馬車にのり木陰を進んでいくと大きさ、雰囲気を変えて感じました。

白く塗られた壁を歩いていくと芸術的な部屋がたくさんありました。ルーヴィッヒ2世がオペラの白鳥化された少年の話に惹かれ、つくった白鳥の間にはカーテンも白鳥でどれほど白鳥好きだったのかが想像できます。オペラの部屋には大きなシャンデリア、鹿、リス、キツツキ、滝、花、木が描かれ森の様子を描いた背景の舞台があり、ルーヴィッヒ2世がドリーミーで芸術的な人ということがわかりました。他にも王座を置くはずだった部屋、14年かけて木彫り師が彫ったベッド、建設上部屋の形を台形にせざるを得なかった部屋には大きさの違う2つのシャンデリアがあり、錯覚を使ってわからないようにしてありました。またルーヴィッヒ2世は大の人嫌いで孤独を楽しむための鍾乳洞の間を作ったり、呼び鈴を作ったりバイエルン発の電話を作ったりする一面もあり物を考案する才能もあったことがわかりました。





## 【学習の記録】

ドイツでみた家は思わず目を惹くような特徴がありました。  
それは家の外壁に絵を描くことです。国民性は真面目と認識されているドイツですが芸術的な一面があることを知ることができました。  
また、古い風情のある家、新しいスタイリッシュな家が混合していること、一回家を建てると 100 年もつことや入間市の様に緑が豊かなこと、多くの家が屋根にソーラーパネルや冬雪が積もっても落ちない様になっている棒をつけ、ゴミを細かく分別し環境に配慮した生活をしていることも学びました。

今回参加させていただいた派遣事業では行って見ないとわからない貴重な体験をすることが出来ました。

サポートしてくださった方々、本当にありがとうございました。





## 【学習の記録】

### 食生活について

浦上 華穂

ドイツでの食事は大体、お肉か魚か野菜でした。どの料理もボリュームのすごさは変わらず、とても美味しかったです。私はお肉が大好きなのでステーキばかり食べていましたが、ボリュームがすごく完食はするものの結構お腹にきました。

それをドイツの人たちは、私達が食べきれなかった分までペロリと食べてしまうのでとても驚きました。

外での食事では美味しいものをお腹いっぱい食べられたのが満足でした。



ホストファミリーの家での食事も、とても美味しかったです。

私がお肉を好きだと知ると、お肉料理をたくさん出してくれました。

私が一番印象に残っているホストファミリーでの食事は、ホストマザーが手作りで作ってくれたラザニアです。できたてのアツアツで食べたラザニアの味は案の定美味しく、夕飯の時間でもない時に作ってくれたラザニアをみんなでペロリとたいらげてしまいました。そのあとの夕食もちゃんと残さず食べました。ラザニアを食べ、そのあとの夕食も食べてしまうくらい家での食事は美味しく、ナイフとフォークでの食事にも慣れ、食事に関しては不自由がありませんでした。

## 【学習の記録】

ですが、お肉が大好きな私でもどうしても欲しくなってしまうものがありました。それは、お米です。それまでご飯が一度も出ず、お肉か魚か野菜のどれかでさすがにご飯が恋しくなった時がありました。ですが、夕飯にご飯がでた時が一度だけあり、その時はとても嬉しかったです。ただ、炊飯器で作っていなくてお鍋のようなもので作っていました。味は、少しねっちょりしていて私が思っていたご飯とは少し違っていましたがお飯が食べられた夕飯はとても良かったです。



ホストファミリーでバーベキューパーティーのような事をしたときには、食卓にこれでもかというほどの料理が並びました。カメラに収まらないほどの料理でした。私は少しずつすべての料理を食べました。どれもほんとに美味しくてドイツ料理が大好きになりました。マニュエルが作ってくれたポテトチップスもあり、大人気でした。家族みんなで食べて、いろいろな話をしながら楽しみました。



# „Konnichiwa“ in Wolfratshausen

## Jugenddelegation aus der japanischen Partnerstadt Iruma eingetroffen

**Wolfratshausen/Iruma** – Nach einem elfstündigen Flug ist am Mittwochabend eine siebenköpfige Jugenddelegation aus Wolfratshausens japanischer Partnerstadt Iruma in der Flößerstadt angekommen. Bürgermeister Klaus Heilinglechner begrüßte die jungen Damen und ihre Reisebegleiter offiziell im Rahmen einer kleinen Feier im Gasthaus Humpelbräu.

Gestern Morgen zeigte der Rathauschef den Gästen, die bei Wolfratshausener Familien

untergebracht sind, seinen Arbeitsplatz. Anschließend stand ein Besuch des Kindergartens in Waldram auf dem Tagesprogramm, am Nachmittag beschritten die Japanerinnen den Bergwaldlehrpfad beziehungsweise den Flößerpfad. Heute geht's zum Schloss Neuschwanstein, geplant ist zudem ein Besuch der Wieskirche. In den nächsten Tagen reisen die Gäste aus Iruma unter anderem zum Geigenbaumuseum nach Mittenwald, erleben das „Ufer-

los“-Sommerfest der Wolfratshausener Musikschule mit, unternehmen eine Stadtrundfahrt in München und werfen einen Blick hinter die Kulissen des Olympiastadions. Am Donnerstagabend findet im Wirtshaus Flößerei eine Abschiedsparty statt. Am Tag darauf geht's zurück nach Iruma.

Betreut werden die Jugendlichen während ihres Aufenthaltes in Wolfratshausen von Mitgliedern des Partnerschaftsvereins Iruma, Mitar-

beitern der Stadt sowie Jugendlichen ihrer Gastfamilien. „Für die Überbrückung der sprachlichen Barrieren“, so formuliert es Rathausmitarbeiterin Claudia Holzer, sorgt Ippei Takama. Der Wahl-Lenggrieser ist in Japan geboren, lebt aber schon seit 1972 in Deutschland.

Die Beziehung der beiden Kommunen begann Anfang der 1980er Jahre. Anfänglich belächelt und als „wenig austauschfähig“ abgetan, wurden die Bande immer enger geknüpft. Seit 1991 vergeht kein größeres Stadtfest in Iruma oder in Wolfratshausen ohne den jeweils gegenseitigen Besuch. Ein sichtbares Zeichen der Verbundenheit mit der knapp 150 000 Einwohner zählenden Stadt 40 Kilometer von Tokio entfernt ist der Japanische Garten am Wolfratshausener Johannisplatz. Es war ein Geschenk anlässlich des 1000. Geburtstages der Flößerstadt im Jahr 2003. ccc



**Gäste aus dem Land des Lächelns:** Zu einer kleinen Willkommensparty hatte die Stadt Wolfratshausen die japanische Jugenddelegation und ihre Gastgeber am Mittwochabend im Gasthaus Humpelbräu eingeladen.

FOTO: SABINE HERMSDORF

### Fotos

von den Ausflügen der japanischen Jugenddelegation finden Sie auf der Facebookseite des Isar-Loisachboten.



## ヴォルフラーツハウゼンで ”こんにちは”

日本の姉妹都市から青少年訪問団が到着

11 時間のフライトを経て水曜日の夕刻、ヴォルフラーツハウゼンの日本の姉妹都市、入間市から 7 人の青少年訪問団のメンバーが筏の町へ到着した。

クラウス・ハイリングレヒナー市長が青少年と随行者にレストラン・フンプロブロイでのささやかなパーティーの席で公式に挨拶を述べた。

昨日の朝、ヴォルフラーツハウゼンの家庭で一夜を過ごしたゲストたちに市長は市庁舎内を案内した。

引き続き予定に従ってヴァンドラム幼稚園の訪問を終え、午後には山へ登り森の学習の小道を散策した。

本日はノイシュヴァンシュタイン城へ行き、ヴィース教会の見学も予定されている。

明日から、入間からのゲストはヴァイオリン博物館などの見学の為、ミッテンヴァルトを訪れ、ヴォルフラーツハウゼンの音楽学校主催の”限りなき夏祭り”を共に体験する。

その後、ミュンヘン市内観光、オリンピックスタジアムの舞台裏を見学。木曜日の夕刻、レストラン・フレセライでお別れパーティーが開催される。その翌日、入間への帰路につく。

青少年たちのヴォルフラーツハウゼン滞在中は入間交流協会のメンバー、市の職員、ならびに彼らのホストファミリーが世話をする。”言葉の壁を越えるために高間一平さんをお願いした”と市役所職員のクラウディア・ホルツァーさんは語った。高間氏は日本生まれであるが既に 1972 年からドイツ在住。

両市の交流関係は 1980 年代の初頭に始まった。

初めは交流の可能性が軽視され嘲笑されたが両市の絆は時を重ねるごとに親密で強いものとなった。1991 年以来、両市での大きなお祭りは無くとも必ず互いに訪問し続けた。東京から 40 km 離れた人口約 15 万人の都市との連帯感ハヴォルフラーツハウゼン市のヨハニス広場にある日本庭園を見れば明らかである。その庭園は 2003 年に開催された筏の市、施政 1000 年祭の折の贈り物である。

微笑みの国からのゲストたち：ささやかな歓迎会にヴォルフラーツハウゼン市は日本の青少年訪問団と彼らのホストファミリーたちを水曜日の夕刻、レストラン・フンプロブロイに招待。



## BESUCH AUS IRUMA



Kontaktfreudig: Miki und Kaho – jüngerer Teil der Münchner Innenstadt mit einem Fantomstein.



Märchentafel: Einblicke erhielt die japanische Delegation bei der Besichtigung von Schloss Neuschwanstein. Zu sehen sind Mitglieder der Gastfamilien und ihre japanischen Gäste (v. l. r.): Sebastian Goller, Philipp Wehbe, Miki Ogawa, Kazuya Sawada, Chizu Wada, Franziska Diesel, Saki Ogawa, Kaho Urakami, Takane Mizuboshi, Kytia Hoffmann und Hana Matsuda. Weitere Fotos finden sich auf der Facebook-Seite des Iar-Löschpostens.



Spieß am Spieß: Spaß hatten die Japanerinnen im Kindergarten Waldtram.



Kein Müdigkeitsgefühl in Mittenwald zeigten die japanischen Gäste bei sportlichen Können.



„Hedakimasu – Guten Appetit!“ hieß es beim Mittagessen im Dreifachrestaurant am Olympiastadion.



Die Angst vor Bienen wurde den Jugendlichen bei der Besichtigung eines Bienenstocks in Weidach genommen.



Im Backen von Brot- und Blätterteig versuchten sich die Besucher aus Iruma in der Königsdorfer Backstube.

## Schluss mit Schüchternheit

### Kommunikation fördert Freundschaft: Delegation aus der japanischen Partnerstadt erkundet die Region

VON PHILIP WEHBE

Wolfratshausen – „Als ich das Programm gesehen habe, war klar, dass die Tage in Deutschland sehr heftig werden“, erinnert sich die 17-Jährige Saki Ogawa. Die Schülerin ist eine der fünf Jugendlichen aus Iruma, die mit Dolmetscherin Chizu Wada und ihrem Delegationsleiter Kazuya Sawada die Hiltl-Stadt besucht haben. Neun Tage verbrachte die siebenköpfige Delegation in Wol-

fratshausen. In dieser Zeit lernten die Besucher nicht nur „ihre Partnerstadt“, sondern auch andere Teile von Oberbayern sowie das Alpenland kennen.

„Am besten haben mir die vielen Wälder gefallen“, sagt Takane Mizuboshi (16). „Die Stunden der Bergwelt in Wolfratshausen hat sehr beeindruckend auf mich eingewirkt.“ Bei einer Waldrundung entlang des Edelsteinpfades haben die japanischen Gäste die Geheimnisse der hügeligen

Natur erkundet. „Dieser Ausflug war am schlauesten“, findet auch Hana Matsuda (16).

An meisten hatten die Jugendlichen aus der Partnerstadt sich zwar auf die Besichtigung von Schloss Neuschwanstein gefreut. Wie sich im Lauf der neun Tage herausstellte, haben ihnen die Aufträge in die nähere Umgebung jedoch am besten gefallen – zum Beispiel der in die Münchner Innenstadt oder in die Partnerstädte in Garmsch-Partenkirchen.

Damit die Zeit in Bayern nicht gut in Erinnerung bleibt, hatte jeder von den 16-jährigen Iarke eine Aufgabe bekommen. „Schreibt einen Aufsatz über Deutschland!“ So haben die Gäste bei jeder Führung, Fahrt und Besichtigung reichlich Fakten notiert, um zu Hause in Iruma über die deutsche Architektur, das Recycling-System, die Arbeit und Ausbildung oder das deutsche Essen zu berichten. Dass der Umgang mit den

deutschen Gastfamilien auch positive Auswirkungen auf die Persönlichkeiten der Jugendlichen hatte, findet die 16-jährige Kaho Urakami. „Ich habe in Deutschland gemerkt, dass die Kommunikation zwischen unseren beiden Ländern sehr wichtig für unsere Freundschaft ist.“ Gerecht hat sich die Schülerin vor allem darüber, dass sie durch den herrlichen und offenen Umgang mit den Deutschen ihre Schüchternheit schnell ablegen konnte.

Ganz klar: Die fünf japani-

schen Jugendlichen, darin sind sie sich einig – würden gerne wieder nach Bayern kommen. „Ich komme bald wieder, bitte vergesst mich nicht“, sagt Miki Ogawa (20) vor der Verabschiedung durch Bürgermeister Klaus Hiltl, Gemeindevorstand und sein Helferteam am heutigen Donnerstag. Ihre jüngere Schwester Saki empfand den Aufenthalt rückblickend überhaupt nicht als belastend. „Im Gegensatz“, sagt die 17-Jährige, „da wir einfach nur schön.“

## IHRE REDAKTION

Hiltlstraße 9  
82515 Wolfratshausen  
Frederik Lang  
Tel. 0 8 1 7 3 1 26 92 41  
Fax 0 8 1 7 3 1 26 92 40  
wolfratshausen@lar-  
loeschbote.de  
www.facebook.com/  
lar.loeschbote

## AKTUELLES IN KÜRZE

### FERIENPASS Freie Plätze

Bei diesen Angeboten des Ferienpasses sind noch Plätze frei: Gartentagsgesellschaft „Im Mühl“, Die Honigmacher: Die Welt der Farben: Lesereichen übermachen, Softball-Nächte: per Hand, Theaterwerkstatt, Hauptrolle ist him: Trommel-Workshop (alle Dienstag, 5. August); Von der Aufnahme zum Film – Wir drehen einen Film zur Plöckerei (Dienstag, 3. August, bis Samstag, 9. August); Handball meets Basketball, Diemelformen der Plöckerei: erzeuge, was sie können: Geburtstagskalendarik, Judo-Schulprogramm für Mädchen und Jungen, Pastellmalen: Kleben mit Pövel (alle Mittwoch, 6. August); Selbstgemachtes Schreibwerkstatt: Abemesser Wilder Wald, Pastellmalen: Alkoholfreie Cocktails machen: Spektakelwerkstatt (alle Donnerstag, 7. August); Anmeldungen für die Kurse sind unter Ruf 0 8 1 7 3 1 2 6 7 0 8 2 3 oder per E-Mail an die Adresse ferienpass@jugend-wolfratshausen.de möglich. Weitere Informationen gibt es auch im Internet unter [www.jugend-wolfratshausen.de](http://www.jugend-wolfratshausen.de).

## VDK

### Kaffeekränzchen

Sein nächstes Kaffeekränzchen veranstaltet der Ortsverband des VDK am morgigen Freitag, 1. August. Wer Interesse hat, ist von 14 bis 16 Uhr im Café Hiltl am Rathaus willkommen.

Weitere Berichte aus Wolfratshausen lesen Sie auf Seite 4.

## 引っ込み思案はもう終わり

友好の為にはコミュニケーションが必要：日本の姉妹都市からの訪問団は当地を探查。

”プログラムを目にした時、間違いなくドイツでは超多忙な日程となるだろうと思った。”と17歳の小川沙紀さんは出発前を思い出す。

彼女は入間からやって来た5人の青少年の中の一人である。

青少年たちは通訳の和田千寿さん、団長の澤田和也さんと共に筏の都市へやって来た。7人の訪問団のメンバーは9日間をヴォルフラーツハウゼンで過ごした。その間に訪問者たちは姉妹都市だけではなくアルゴイおよび他のオーバーバイエルンを訪れ体験した。

”一番気に入ったのは豊かな森、特にヴォルフラーツハウゼンの山の上に広がる森は心を落ち着かせ穏やかな気持ちにさせてくれた。”と16歳の三星天子さんは言う。山の中の体験学習の小道で日本からのゲストは当地の自然の秘密を探查した。

”この山散策は一番、楽しかった。”と16歳の松田華奈さんも言う。

姉妹都市からの青少年たちは大抵、ノイシュヴァンシュタイン城を気に入るだろうに、どのように9日間を過ごすのかは明らかであった。例えばミュンヘン市内、ゲーミッシュ・パルテンキルヒェンのパートナッハ溪谷など。

しかし市内でのハイキングが最も気に入ったようだ。

これでバイエルンで過ごした時間はよい思い出となって残るであろう。”ドイツについてレポートを書きなさい”と言われ各々、東京を旅立つ時に課題を持ってやって来たのだ。

だから、ゲストたちは全ての施設でのガイドツアー、小旅行、見学の折に多くの事柄を書き留める。入間に戻ってドイツの建築、リサイクリングシステム、またはドイツの食について報告するために。

ドイツ人のホストファミリーとの付き合いもまた日本の少女たちの人格の上に好ましい影響を与えたのだろう。16歳の浦上華穂さんは、”ドイツに来て友好の為には双方（ドイツ/日本）の間のコミュニケーションがとても大切だと気づいた。”と言う。

ドイツ人たちと互いに心を開き通わせることで引っ込み思案さを脱ぎ去ることができ、それが何よりも嬉しかったと日本の少女たちは言う。

全く確かで、日本の少女たちが5人とも同意見なのは再びバイエルンを訪れたいという事だ。

クラウド・ハイリングレヒナー市長とお別れする前に、” すぐに、また来ますのでどうか、私を忘れないでください。” と小川美紀さんは（20）言う。そして、今日の木曜日に帰路につく。

彼女の妹の沙紀さんはこの滞在を振り返れば当初は慌ただしいとしか感じていなかったのだが、” それどころか、とにかく素晴らしかった。” と17歳の彼女は言う。

#### 左上の写真の記事

開けっぴろげさ：美紀と華穂はミュンヘン市内でパントマイム芸人とハイ、ポーズ！

#### 中央の写真の記事

夢のように素晴らしい印象：日本の訪問団はノイシュヴァンシュタイン城見学を経験。ホストファミリーと彼らの日本からのゲストたち：セバスチャン・ゴラー、フィリップ・ヴェーベ、小川美紀、澤田和也、和田千寿、フランツィスカ・ディースル、小川沙紀、浦上華穂、三星天子、リディア・ホッフマン、松田華奈。

引き続きの写真はフェイスブックのイザール・ロイザッハページにて閲覧可。

#### 右上の写真の記事

ヴァンドラム幼稚園にて玩具で楽しむ日本の少女たち。

ミニゴルフの際に：ミッテンヴァルトにて日本人ゲストは運動能力を披露。

#### 左下の写真の記事

” いただきます” = “Guten Appetit”：昼食の際に一言。

オリンピックスタジアム、テレビ塔、回転レストランにて。

#### 中央下の写真の記事

ミツバチの恐怖：ヴァイダッハにて青少年たちはミツバチの巣箱を見学。

#### 右下の写真の記事

プレーツェール作りと折込パイ生地のパン作りに入間からの訪問者たちがケーニッヒスデルファーパン工房にて挑戦。

# Annäherung durch Austausch

Die Familie Goller aus Wolfratshausen beherbergt derzeit die 20-jährige Japanerin Miki Ogawa

**Wolfratshausen** – Die Familie Goller aus Wolfratshausen ist erfahren darin, japanische Jugendliche bei sich aufzunehmen: Die 20-jährige Miki Ogawa ist bereits ihr dritter Gast aus Iruma. „Vor vier Jahren hatten wir einen 16-jährigen Bub, danach eine andere 20-jährige“, sagt Familienvater Stefan Goller. Miki habe schon eine längere Zeit in Australien verbracht, der Junge damals sei in Amerika gewesen. „Solche Leute tun sich leichter. Sonst sind sie ziemlich schüchtern und zurückhaltend und wollen ja nichts falsch machen.“ Miki hingegen be- wege sich ziemlich frei und gehe auch mal einfach in die Küche, um sich einen Tee zu machen. Goller findet diese Selbstständig- keit toll.

Die Sitten und Verhaltensweisen in Ja- pan sind andere als in Deutschland. Vor der Ankunft des amerikaerfahrenen Gas-

tes sei die Familie gewarnt worden. „Die Be- treuer der Gruppe haben uns gesagt, der Junge sei frech.“ Er habe sich eben verbal- ten wie europäische oder amerikanische Jugendliche. „In Japan darf man zum Bei- spiel nicht in der Öffentlichkeit niesen oder sich schnäuzen“, erklärt Goller, der

**„Früher hat man sich auch nicht die Hand gegeben, sondern man hat sich verbeugt.“**

selbst schon mit seiner Frau dort gewesen ist. „Aber durch den Austausch nähert man sich gegenseitig an. Früher hat man sich auch nicht die Hand gegeben, sondern man hat sich verbeugt. Inzwischen ist das ganz normal. Man gewöhnt sich an die Sit- ten der anderen.“

Trotz des gut gefüllten Programms der Gruppe bleiben am Abend noch ein paar Stunden mit der Gastfamilie. Zeit für Ge- spräche und gemeinsames Essen. „Von zu Hause erzählen sie von sich aus nicht so viel, da muss man schon nachfragen“, sagt Goller. „Wir reden eher darüber, was man in Bayern so machen kann, über Sehens- würdigkeiten, oder Musik.“ Miki höre mehr westliche Musik als asiatische. Das Feedback zu den Aktivitäten tagsüber sei positiv. Der Sonntag stand ganz den Gastfa- milien zur Verfügung. Familie Goller und Miki unternahmen einen Ausflug nach Innsbruck und schauten vorher noch bei den Kristallwelten vorbei.

„Sie sind alle sehr wissbegierig“, berich- tet Goller aus seinen Erfahrungen. „Miki schreibt alles mit, was sie unternimmt, macht viele Fotos und Notizen.“ Sie sauge

alles förmlich auf. Sogar einige deutsche Wörter habe sie auf diese Weise schon ge- lernet. „In ihrem Zimmer wiederholt sie, was sie aufgeschrieben hat. Guten Morgen und Vielen Dank kann sie schon sagen.“

In der Schule habe Miki zwar Englisch gelernt, aber wenig gesprochen. „Sie kennt außerdem ja nur das japanische Englisch. Am Anfang war es für sie nicht leicht, uns zu verstehen. Inzwischen geht das.“

Vorbereiten musste sich Familie Goller auf den Besuch von Miki nicht. „Wir wuss- ten ja, was uns erwartet und nehmen's, wie's kommt.“ Zu ihren ersten Gästen ha- ben sie noch immer Kontakt und schrei- ben sich ab und zu Emails. Mikis Familie möchte sie gerne besuchen, wenn sie das nächste Mal in Japan sind. Wann das sein wird, ist unklar, aber „wir fahren sicher nochmal rüber“. **LOUISA AUSTERMANN**



## 交流を通して融和

ヴォルフラーツハウゼンのゴラー家は今、20歳の小川美紀さんを泊めている。

ヴォルフラーツハウゼンのゴラーさん一家は日本からの青少年の受け入れの経験がある。

20歳の小川美紀さんは彼らにとっては入間からの3人目のゲストである。 ”4年前に16歳の少年をその後、20歳の少女を受け入れた。”とお父さんのシュテファンさんは言う。

美紀さんは長い間、オーストラリアで過ごし、あの時の16歳の少年もアメリカで過ごした経験を持つ。 ”海外経験のある子達はずっと楽に溶け込むことができる。そうでなければおおむね引っ込み思案で控えめでしくじりたくないと思うものだ。”美紀さんはそれに反してかなり自由に振舞う。 自分でお茶を入れるために台所へ平気で入る。ゴラーさんは彼女のそんな自立した姿勢を素敵だと思う。

ドイツと日本では慣習や行動の仕方が異なる。

アメリカ生活を経験したゲストが到着する前に用心するように注意をうけていた。当時の訪問団随行者は ”その若者は生意気だ。”と私たちに言った。しかしその少年はただヨーロッパ人やアメリカ人のごとく振舞っただけだ。

”日本では人前でくしゃみはしないし大声で怒鳴ったりもしない。”と自らも夫人と共に訪日したことのあるゴラーさんは説明する。

”しかし、交流を通して人は互いに近づく。以前は挨拶の時、握手せずに会釈した。そうこうするうちに他方の慣習に慣れ親しみ握手はいたって当たり前となった。”

訪問団のプログラムはぎっしり詰まっているのだが夕刻の数時間はホストファミリーと過ごす。

一緒に食事をとったり話したりする時間だ。

“家のことはあまり自分から話さないの尋ねてあげなければならない。私たちはこれまでにバイエルンで何が出来るか、見る価値のある所、音楽について話した。”

美紀さんはアジアの音楽よりも西洋の音楽をよく聴く。

昼間の活動内容については積極的に話して聞かせてくれる。

日曜日は丸一日、ホストファミリーと過ごす日だ。

ゴラー家と美紀さんは途中でクリスタルの世界（スワロフスキー美術館）へ立ち寄りインスブルクへ小旅行する。

”美紀は好奇心旺盛でやったことは全て書きとめ沢山の写真を撮る。

自分の部屋では書き留めたものを復習していた。’ Guten Morgen’（おはよう）や ’ Vielen Dank’（ありがとうございます）は既に話すことができる。”とゴラーさんは美紀さんと過ごした体験から話す。

彼女は全てを周到に吸収する。そうやって彼女はいくつかのドイツ語を習得したのであろう。美紀さんは学校で英語を学んだが会話は十分学んでいない。

” おまけに彼女の学習したものは日本式英語。初めは英語で理解し合うことは簡単ではなかった。しかし、そうこうするうちに何とかなるようになった。”とゴラーさんは言う。

美紀さんの訪問に際しゴラー家には心の準備は必要なかった。

” 何が起こるのか、どうすればいいのかわかっていたから。”とゴラーさん。最初のゲストとは今尚、時折、メールを書いて連絡を取り合っている。美紀さんの家族はゴラー一家が次回訪日の折には会いに行きたいと思っている。 ” いつになるかはっきりしていないが必ず日本へ再び行くでしょう”とゴラーさんは言う。



Eine Gruppe japanischer Jugendlicher ist zusammen mit zwei Übersetzern aus der Partnerstadt Iruma zu Besuch. Zusammen mit Dietlind Diepen (rechts außen) besuchte sie den Waldlehrpfad im Bergwald von Wolfratshausen. FOTO: HARTMUT PÖSTGES

## Gepflegte Freundschaft

Aus der japanischen Partnerstadt Iruma sind derzeit sieben Besucher in Wolfratshausen zu Gast. Auf dem Programm steht neben international bekannten Sehenswürdigkeiten auch der Waldlehrpfad

VON LOUISA AUßERMANN

**Wolfratshausen** – Direkt am Ufer der Loisach liegt der japanische Garten, ein Geschenk der Bürger von Iruma an ihre Partnerstadt Wolfratshausen. Sieben dieser japanischen Bürger hören Dietlind Diepen zu, der Vorsitzenden des „Vereins zur Förderung der Partnerschaft zwischen Iruma und Wolfratshausen“. Fünf junge Mädchen im Alter zwischen 16 und 20 sind mit ihrer Dolmetscherin Chizu Wada und dem Delegationsleiter Kazuya Sawada aus Iruma gekommen, um eine Woche lang die deutsche und bayerische Kultur und Wolfratshausen kennenzulernen.

Seit 1987 sind die beiden Städte freundschaftlich miteinander verbunden. Heute arbeiten sie durch ihre Partnerschaftsvereine eng zusammen und organisieren einen regelmäßigen Austausch: Die deutschen und japanischen Jugendlichen bestechen sich im Wechsel einmal im Jahr, eine Delegation deutscher Erwachsener reist jährlich nach Iruma, die erwachsenen Japaner sind alle zwei Jahre in Wolfratshausen zu Gast. „Die Welt ist ein großes Dorf“, sagt Diepen. „Man kann nur miteinander umgehen, wenn man den anderen kennt, natio-

nal wie international.“ Kennenlernen können die japanischen Mädchen in ihrem einwöchigen Aufenthalt einiges. Auf dem Programm, das die Stadt zusammen mit dem Verein aufgrund von Erfahrungen und Wünschen der Gäste zusammengestellt hat, stehen Touristenattraktionen wie das Schloss Neuschwanstein oder die Allianz-Arena. Aber auch an den sozialen Struktu-

ren besteht ein reges Interesse. Die Gäste möchten außerdem einen ganzen Tag in Wolfratshausen verbringen, um ihre Partnerstadt kennenzulernen. „Heute morgen waren wir schon im Kindergarten, danach auf dem Bauernhof, wo wir eine richtige bayerische Brotzeit gemacht haben“, berichtet Holzer.

Noch etwas müde von der langen Reise – und der bayerischen Brotzeit – setzen die Gäste ihren Tag in Wolfratshausen fort, indem sie auf dem Bergwaldlehrpfad wandern. Mit dabei sind auch drei deutsche Jugendliche aus den Gastfamilien, bei denen die Japaner unterkommen. „Zuhause funktioniert es super mit meiner Gastschwester, sie ist wahnsinnig sympathisch“, erzählt Sebastian Goller. Mit dem Englischen hätte sie allerdings manchmal Schwierigkeiten. „Mit Händen und Füßen können wir uns verständigen.“

Wada und ihr in Lenggries wohnender Kollege Ipppei Takama übersetzen geduldig alles, was Dietlind Diepen an den 13 Stationen des Erlebnispfades erklärt. Die Mädchen nehmen alles neugierig auf, sowohl mit den Sinnen als auch mit der Kamera.

„Normalerweise sind es jedes Jahr ungefähr acht Jugendliche, die aus zwischen 30

und 40 Bewerbern ausgewählt werden“, erklärt Takama in flüssigem Deutsch. Dass es heuer nur so wenige seien, liege an dem Termin, der sich mit den Abschlussprüfungen der Studenten kreuze. Vor der Reise hätten sich die Jugendlichen vier mal getroffen, um etwas über die Geschichte der Städtepartnerschaft und die Sitten in Deutschland zu lernen.

**„Es sind inzwischen richtige Freundschaften gewachsen.“**

„Der neue Bürgermeister von Iruma möchte einen intensiveren, nachhaltigeren Jugendaustausch fördern“, sagt Diepen. Im Herbst werde sich dazu das Partnerschaftskomitee in Wolfratshausen treffen. Vor einem Monat wurde der Verein Mitglied der Deutsch-Japanischen Gesellschaft in München. Aushänge vor dem japanischen Garten informieren über Veranstaltungen, die das Verständnis für die andere Kultur fördern. „Es sind inzwischen richtige Freundschaften gewachsen“, freut sich Holzer. „Und Freundschaften muss man pflegen.“



Die Mädchen nehmen alles auf: mit ihren fünf Sinnen und den Kameras. FOTO: HARTMUT PÖSTGES

## 大切に育まれた友好

今、日本の姉妹都市、入間からヴォルフラーツハウゼンへ7人がゲストとして来訪。滞在中のプログラムは世界的に有名な見る価値のある所から市内の森の小道にまで及ぶ。

ロイザッハ川の岸辺の直ぐ傍に日本庭園はある。姉妹都市であるヴォルフラーツハウゼンへの入間市民からの贈り物である。7人の日本人たちは入間交流協会の会長を務める、ディートリント・ディーペンさんの話に耳を傾ける。16歳から20歳の5人の女の子たちと通訳の和田千寿さん、そして団長の澤田和也さんは一週間に渡りドイツとバイエルンの文化そしてヴォルフラーツハウゼンについて学び人々と知り合う為に入間からやって来た。

1987年に両市の間で友好関係が結ばれた。今日では交流協会によって親密に運営され定期的な交流が準備実行されている。ドイツと日本の青少年たちは一年おきに互いに訪問しあい、ドイツの大人の訪問団は入間へ毎年、旅をする。日本の大人の訪問団は二年に一度、ヴォルフラーツハウゼンへやって来る。 ”世界は一つの大きな村。” ”互いに行き来きするうちに異なる文化を学び、人々は国際的になることができる”とディーペンさんは言う。日本の少女たちは一週間の滞在中にいくらか学び、人々と知り合うことができるのだ。滞在中のプログラムは市と交流協会が今までの経験とゲストの希望に基づいて作成する。例えばノイシュヴァンシュタイン城やアリアンツ・アリーナのような観光名所。また、積極的な興味は社会的な組織などにも及ぶ。更にゲストたちは姉妹都市をよく知るために丸一日、市内で過ごす事を希望している。 ”今日の朝、既に市内の幼稚園を訪問しその後、バイエルンの正統な手作りの食事がとれる農園を訪れた。”とホルツァーさんは話してくれた。長旅から来る疲れでまだ、眠そうに食事をとる。

ゲストたちは引き続きヴォルフラーツハウゼンで一日を過ごす。山の中にある森の学習の小道を散策。その折には日本の青少年たちが泊まっているホストファミリーの中の三人のドイツの青少年たちも同行する。 ”家ではゲストの子ととても上手くいっているよ。彼女とは素晴らしく気が合うんだ。”とセバスチャン・ゴラー君は語る。英語での会話は時として困難であるだろうに。 ”手足を使って、身振りで理解できるよ”と彼は話す。和田さんとレングリースに住む高間一平さんは皆に忍耐強くディーペンさんが13箇所の学習体験ポイントで説明する内容を通訳する。



少女たちは関心の程を感覚で示すだけでなくカメラを向けることで示す。”通常は30～40人の応募者の中から8人の青少年が選抜される。”と高間さんは流暢なドイツ語で説明する。

今年は派遣日程が大学生の試験期間と重なってしまい例年より少ない人数となったそう。

旅立つ前に青少年たちは姉妹都市交流の歴史やドイツの慣習などを学ぶ事前研修の為に4度集まった。

そうこうするうちに確かな友好関係へ進展を遂げた。

”入間市の新市長は徹底的で持続的な青少年交流を望んでおられる。”とディーペンさんは言う。

秋にはヴォルフラーツハウゼンで姉妹都市交流委員会が開かれる。

一ヶ月前にはミュンヘンでドイツ・日本交流協会の会合が持たれた。

日本庭園の前にある掲示板では異文化理解を促進するための催しについての情報が開示されている。

”そうこうするうちに確かな友好へと進展してきた。”とホルツァーさんは喜ぶ。

”そして、友好関係は手をかけて育み保って行かなければならない。”と。

少女たちは全てを受容する、彼女たちの五感とカメラで。

## Let it go

The snow glows white on the mountain tonight.  
Not a footprint to be seen.  
A kingdom of isolation, and it looks like I'm the Queen.  
The wind is howling like this swirling storm inside  
Couldn't keep it in, Heaven knows I tried.

Don't let them in,  
Don't let them see  
Be the good girl you always have to be  
Conceal, don't feel,  
Don't let them know  
Well now they know

ありのままの 姿見せるのよ  
ありのままの 自分になるの  
何も怖くない 風よ吹け 少しも寒くないわ

It's funny how some distance makes everything seem small  
And the fear that once controlled me can't get to me at all

It's time to see what I can do  
To test the limits and break through  
No right, no wrong, no rules for me, I'm free

イッヒ ラ ス ロ ス ラ ス イェット ロ ス  
Ich lass los, lass jetzt los.

ヌン ビン イッヒ エンドリッヒ ソーヴァイト  
Nun bin ich endlich soweit

イッヒ ラ ス ロ ス ラ ス イェット ロ ス  
Ich lass los, lass jetzt los

ドッホ トレーネン ジート イア エヒト  
Doch Tränen seht ihr nicht.

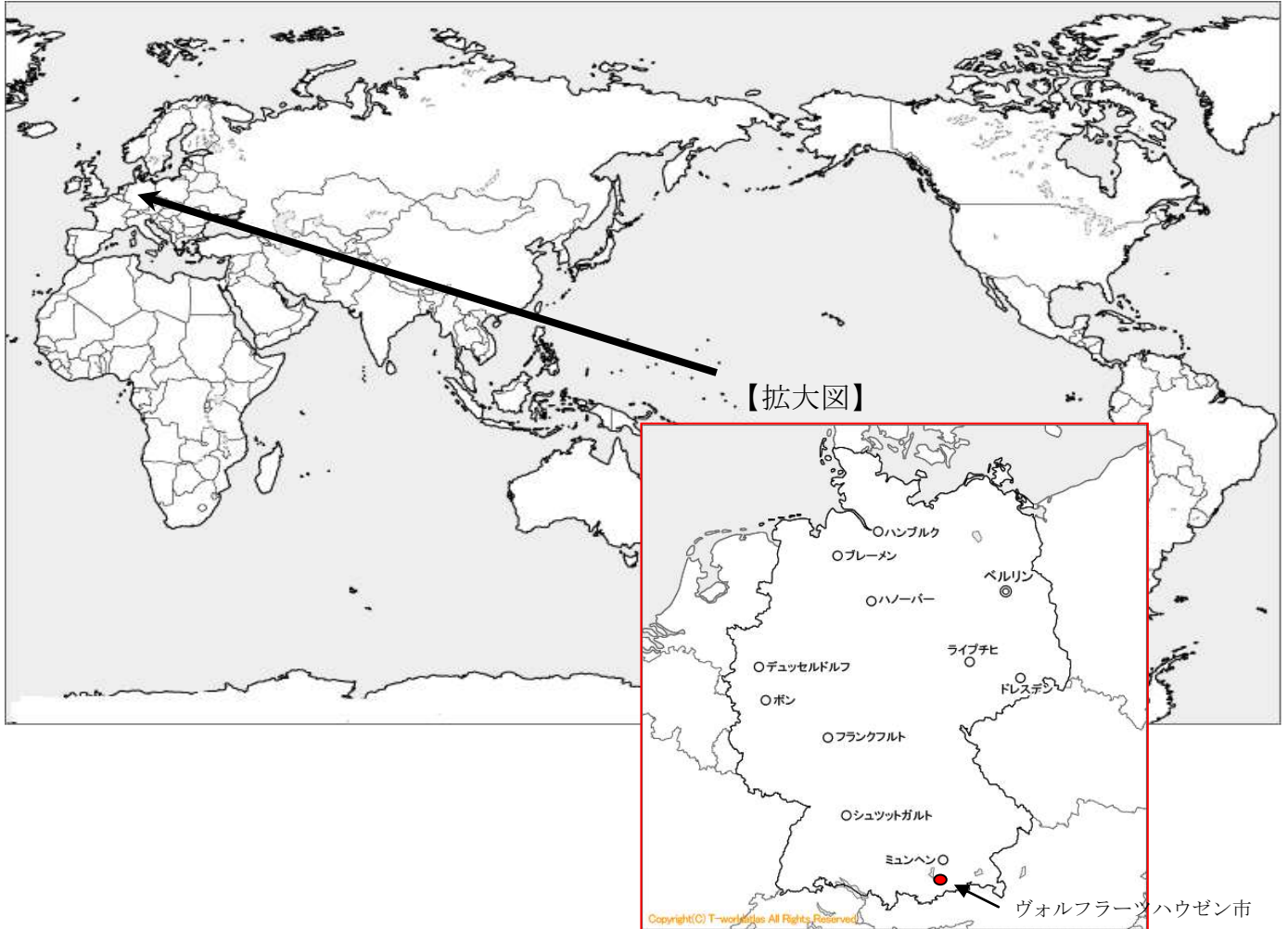
ヒアー ビン イッヒ ウントウ ブライブ ヒアー  
Hier bin ich und bleibe hier.

ウントウ マイン シュトーラム ジート アウフ  
Und ein Sturm zieht auf.

My power flurries through the air into the ground  
My soul is spiraling in frozen fractals all around  
And one thought crystallizes like an icy blast  
I'm never going back, the past is in the past

Let it go, let it go  
And I'll rise like the break of dawn  
Let it go, let it go  
That perfect girl's gone  
Here I stand in the light of day  
Let the storm rage on  
The cold never bother me anyway





編集・発行

〒358-8511 入間市豊岡1-16-1  
入間市 自治文化課 国際交流担当

TEL 04-2964-1111 内線 2146・2147

FAX 04-2964-7818

URL [www.city.iruma.saitama.jp/i-society](http://www.city.iruma.saitama.jp/i-society)

E-mail [i-society@city.iruma.lg.jp](mailto:i-society@city.iruma.lg.jp)

Facebook [www.facebook.com/isociety2012](https://www.facebook.com/isociety2012)